

— 国立広島原爆死没者追悼平和祈念館 企画展 —

受け継ぎ、語り継ぐ

原爆と

入場
無料



戦時中の校章
所蔵 皆実有朋会

第一県女

とき 令和8年(2026年)3月1日(日)～令和9年(2027年)2月28日(日)

ところ 国立広島原爆死没者追悼平和祈念館
地下1階 企画展示室及び体験記閲覧室

〒730-0811 広島市中区中島町1-6 平和記念公園内 Tel.082-543-6271/ Fax.082-543-6273

開館時間 3月～7月 8:30～18:00
8月 8:30～19:00 (5日、6日は20:00)
9月～11月 8:30～18:00
12月～2月 8:30～17:00

休館日 12月30日及び31日



広島県立広島第一高等女学校(現:広島県立広島皆実高等学校)は通称「第一県女」と呼ばれ、名門校として多くの生徒があこがれを持って入学しました。しかし、1945年8月6日の原爆投下により、生徒・教職員合わせて301名が犠牲となります。爆心地から800mの土橋付近で建物疎開作業を行っていた1年生223名は、その全員が亡くなりました。

被爆した第一県女の生徒、そしてその最期を看取りその様子を語った家族の声を、映像や資料を交え、受け継ぎ、語り継いでいきます。



木村幹代さん
(当時13歳)

原 爆が落ちたのは、建物疎開の作業が始まったばかりのときで、一番前にいた私は、次の人に渡そうと瓦を持ち上げて、振り向いたところだった。爆風で飛ばされ、しばらくして周りが見えて、動けるようになると、皆と一緒に「逃げようー!」と必死に逃げた。しかし、級友は途中で皆倒れ、いつの間にかひとりになっていた。(中略)ここで倒れて死んでしまえば、着衣も焼けて裸の自分は、どこの誰だかわからなくなってしまう、そんな情けないことになるのはいやだと、必死に元気をだして、私は己斐国民学校へ向かった。

〈幹代さんが亡くなる前に自ら語った被爆状況。幹代さんの姉・妙子さんの証言より抜粋〉



▲体験記全文



松原和子さん
(当時13歳)

八 時十五分、何が何やら、さっぱり分からず、ピカの光も、ドンの音も気付かずにそのまま、本能的に、校舎の側溝へ身を伏せましたが、すぐに、皆が先を競って防空壕に入りました。(中略)その時、校庭に全身やけどで顔は目も鼻も口も赤黒く、血か泥か、衣服はなく、ぼろぼろの布が体にひっついて、ぶら下がり、幽霊のように両手を前にして、皮膚はめくれて、指の先にたれ下がり、男女の別も分からぬ人が、やっと分かる、か細い声で何か言っていました。最初の衝撃が私の全身に走りました。体中がふるえて止まりません。(中略)しかしその後はそんな人を何人、何千人見たでしょう、でもなぜか、もう体がふるえる事はありませんでした。



▲体験記全文



交通のご案内

JR広島駅(南口)から(約20分)

※すべて下車後は徒歩約5分

- バス/広島バス吉島方面行きで「本通り」下車
- 市内電車/紙屋町経由広島港(宇品)行きで「本通」下車
宮島口、江波行きで「原爆ドーム前」下車

※駐車場はありません。



国立広島原爆死没者追悼平和祈念館

Hiroshima National Peace Memorial Hall for the Atomic Bomb Victims